平城京跡から出土した磚仏（せんぶつ）

平城京右京二条三坊十一坪　　奈良市菅原町
平城京左京三条二坊九坪　奈良市二条大路南一丁目

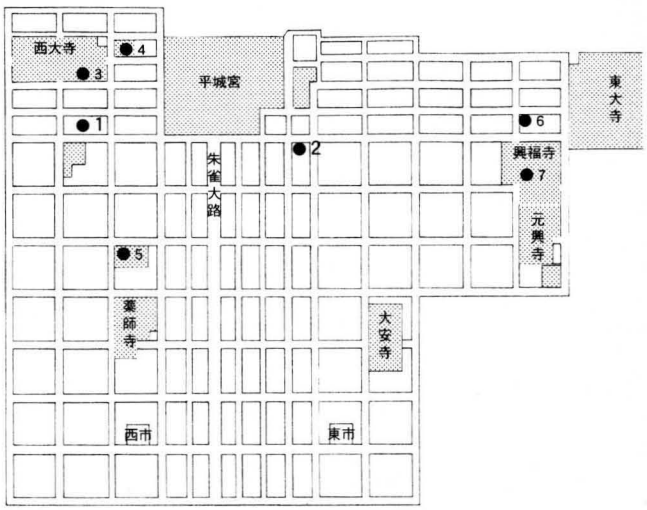
平成12年度に、平城京跡で行った2箇所の発掘調査で磚仏が１点ずつ出土しました。

平城京右京二条三坊十一坪（右図－1）

近鉄西大寺駅から約0.6km南西で実施した調査です。十一坪の南西隅にあたります。ここでは、古墳時代の溝3条、奈良時代の十一・十二坪坪境（つぼざかい）小路（こうじ）・同北側溝、掘立柱建物（ほったてばしらたてもの）10棟、掘立柱塀（へい）6条、土坑（どこう）2、井戸3基、平安時代以降の掘立柱建物2棟、溝11条などが見つかりました。これらの遺構は重複関係からみて少なくとも6時期以上の変遷が考えられます。磚仏は奈良時代の遺物包含層から１点出土しました。

平城京左京三条二坊九坪（右図－2）

奈良市役所の駐車場で実施した調査です。九坪の北東部にあたります。ここでは、奈良時代より前の溝1条、奈良時代の掘立柱建物2棟、掘立柱塀3条、土坑2、井戸3基、溝8条などが見つかりました。これらの遺構は重複関係からみて少なくとも2時期以上の変遷が考えられます。磚仏は奈良時代の整地層から1点出土しました。



平城京内磚仏出土地

平城京域では、磚仏が7箇所から出土しています。それは下表の通りです。奈良市内では、ほかに、敷島町阿弥陀山寺跡（阿弥陀谷廃寺）で火頭（かとう）形三磚仏と方形三尊（けいさんぞん）磚仏、秋篠町・山陵（みささぎ）町の秋篠・山陵遺跡で十二尊連坐（じゅうにそんれんざ）磚仏、大和田町滝寺遺跡で独尊（どくそん）磚仏？、古市町の古市方形墳で方形三尊磚仏が出土しています。

平城京内出土の磚仏

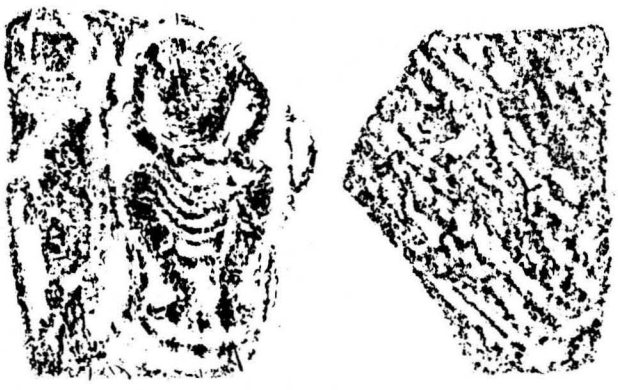
	遺跡名	出土地	種類名
1	平城京跡 （右京二条三坊十一坪）	奈良市菅原町	十二尊連坐磚仏
2	平城京跡 （左京三条二坊九坪）	奈良市二条大路南1丁目 （奈良市役所）	小型方形三尊磚仏
3	西大寺旧境内（西塔跡）	奈良市西大寺芝町	十二尊連坐磚仏
4	西隆寺旧境内（塔跡）	奈良市西大寺本町	十二尊連坐磚仏
5	唐招提寺旧境内（戒壇院跡）	奈良市五条町	小型独尊磚仏
6	平城京跡 （左京二条七坊三坪）	奈良市北魚屋西町 （奈良女子大学）	小型方形三尊磚仏
7	興福寺旧境内（南西隅）	奈良市登大路町	十二尊連坐磚仏

拓本は実大

平城京右京二条三坊十一坪出土磚仏

連坐磚仏と呼ばれるものです。連坐磚仏には、四尊のものと十二尊のものがありますが、四尊は上下、左右ともに2体ずつ、十二尊は上下3段に、左右4列に並べたものです。今回出土したものは、十二尊連坐磚仏で、十二尊のうち、二尊分が残存しており、高さ6.4㎝、幅7.1㎝、厚さ1.7㎝です。十二尊分すべて揃っていますと、高さ約18.0㎝、幅約14.0㎝に復元できます。尊像は蓮華座上に結跏趺座*1)して、印を結んでいるものと思われます。衲衣*2)は偏袒右肩*3)にまとっています。光背には頭光と身光があり、ともに火炎が施されています。頭光の上には天蓋*4)があります。それぞれの尊像の間は、凸線で区画されています。

*1) あぐらに近いのですが、必ず足の裏は上に向けます。
*2) 体に巻き付ける布のこと。
*3) 左の肩だけに布を巻き付け、右の肩をあらわにする。
*4) 日光をさえぎるために、貴人にさしかけられる傘のようなもの。



表面　　裏面

拓本は実大

平城京左京三条二坊九坪出土磚仏

小型方形三尊磚仏と呼ばれるものです。中尊と向かって左の脇侍部分が残存しています。高さ5.0㎝、幅3.9㎝、厚さ1.1㎝です。橘寺旧境内や川原寺跡（奈良県明日香村）から出土している方形三尊磚仏は、高さ22.0㎝前後、幅18.0㎝前後の大きさで、これに比べて小さいことから小型を付して呼びます。中尊は宣字座*5)に倚座*6)して、印を結んでいるものと思われます。両足で蓮華座を踏んでいます。衲衣は偏袒右肩にまとっています。首から上は欠損しています。向かって左の脇侍は、全体に摩滅や欠損が激しいので、詳細はわかりませんが、蓮華座上に立ち、左手で何かを持っていることが確認できます。中尊の左側には、右の脇侍の右手と思われるものが見えます。

*5) 仏像がのる台の一つ、全体の形が「宣」の字に似ていることからそう呼ばれます。
*6) 椅子に腰掛けるように座ること。

磚仏とは、 笵型に粘土をつめて半肉彫りの仏像を作り、型から粘土を取り出して乾燥させ、それを焼いて作ったものです。金箔や銀箔を貼ったり、彩色したりします。最大の利点は型を使用しますから、同じものを簡単にしかも大量に作ることができるということです。日本で磚仏が盛んに作られるようになるのは、7世紀後半から8世紀中頃にかけてです。7世紀後半より古いものはまだ知られていません。奈良時代よりあとの時代のものもありますが、数的にみるとごくわずかしかありません。用途については、塔堂内の壁面を飾るもの、念持仏として用いられたもの、厨子の奥壁や扉につけて用いられたものではないかという3つの考えかたがあります。今回、平城京内から出土した磚仏は、数が少ないことから考えると、念持仏として使われたのではないかと思われます。

発行　奈良市教育委員会　平成13年6月